

「大腸がん検診で問診票（スコア）の有用性について」

○武藤 和也（財団法人郡山市健康振興財団）
大櫛 陽一（東海大学医学部 基礎医学系）

【目的】

郡山市は大腸がん検診に問診票（スコア）を導入し、スコア3.0以上の受診者に受診勧奨を実施している。

当施設でも市に準じて1996年から事業所健診の大腸がん検診に問診票を用いて便潜血陰性でスコア3.0以上の受診者に受診勧奨として紹介状を添付している。この受診勧奨対象者の中から大腸がんが発見されたことからスコアが検診にどの程度有用であるのか検証したので報告する。

【対象】

1996年4月1日～2011年8月まで、事業所健診で受診をした男性39590名、女性28579名の計68169名

【方法】

対象者が大腸がん検診を受診する際に記入した問診票（スコア）のデータから、非大腸がん群と大腸がん群に分けてMann-WhitneyのUの検定を実施した。

【結果】

スコアと大腸がんの検定結果に有意差が認められたので、便潜血検査陰性の受診者から大腸がんを発見するのにスコアが有用であることが認められた。

【考察】

当施設で便潜血検査が陰性でスコア3.0以上の受診勧奨者から大腸がんが発見された例は6名で、受診勧奨者によって大腸がん発見が可能であると考えられる。また、大腸がんと診断された延べ200名の受診前後のスコアの年次経過をみるとスコアが3.0より低い傾向を示しているが、そのスコアと大腸がんに有意差が認められた。これは、早期の大腸がんでは自覚症状が少ないためとも考えられるので、今後はスコアの内容と大腸がんがどのように関与しているかを分析し、大腸がんの早期発見にスコアが有効であることをさらに検証していきたい。